

年 頭 所 感

理事長
高 木 建

『鉄鋼内需、再生スタートの年に』

皆さん、明けましておめでとうございます。

昨年はまことに憂鬱で閉塞感に包まれた一年でありました。大震災とその後の政治・行政の拙劣さが最大の原因であることは言うまでもありません。しかし漸く復興の道筋が見えるところまで来ました。昨年の今頃は漸くリーマンショックの傷も癒え、さあ出直すぞと希望に燃えていたことも考え併せると、今年こそ「鉄鋼内需、再生スタートの年」と位置づけ自主自立の精神で一步步つ坂を上っていきたいものです。

今年、我々を取り巻く事業環境の変化としては①新日鉄住金の誕生という鉄鋼メーカーの大型再編、そして②超円高継続により国内製造業の海外流失の顕在化が挙げられると思います。①については鉄本体だけでなく関連事業分野の統合再編も必至であり、これを契機に切板の供給地図が大きく変わることもあり得ることに留意する必要があります。

また、②に関しては昨夏以来の超円高に対し自動車・電機といったグローバル企業は既に海外流出の動きを速めています。他の製造業、建機・工作機械なども今年中頃から生き残りをかけて一気に海外流出を進めることが懸念されます。このまま超円高が続く限り国内に残るのは管理・研究開発部門だけという需要家もあり得るだけに、製造業に関わる会員企業はその動向には細心の注意を払うと同時に需要減への備えを怠ることはできません。

また、このような状況や震災復興関連から本年は建設分野が鉄鋼内需再生に向け改めて重要な役割を担うことになりそうです。リーマンショック後長らく低迷状態にありましたが、漸く昨秋から鉄骨・橋梁とも底離れの様相が見えてきました。しかし、だからといって従来 of 事業慣行をそのまま踏襲し続けたのでは需要回復による量的な恩恵は享受できても肝心の加工マージンの回復は覚束ないのです。

ではどうすべきか。まずはこれまで建設分野で支配的だった「受注量・販売量」一辺倒から「加工マージン・収益」最優先に経営指針を改めるべきです。そして、この機に需給ギャップの解消を急ぐ必要があります。鉄骨需要は5年前までの水準と比べても6割程度の水準で推移すると予想されており、4割近い過剰能力の解消が不可欠なのです。これは個社単位での生産調整や合理化で対応しきれないレベルではなく、業界の再編・統合による加工拠点の集約も避けては通れません。既に昨年後半からこうした動きが出始めていることにお気づきの会員もおられるでしょう。今や家業でやっているから統合再編は難しいと言っている時代ではありません。主体性を保ちつつどのように将来展望を

拓くか自らの立ち位置を見極めていく必要があると思います。

と同時に今後事業継続が可能な加工マージンを確保出来る態勢づくりが不可欠です。これまで長きに亘り続いてきたG C・設計事務所～ファブ～シヤ等加工業者～鉄鋼メーカーがそれぞれの最適解を追求する、謂わば硬直化したタテ型事業構造が続く限り建設業の健全な発展は望めません。

この際鉄鋼メーカー、流通・加工、ファブで構成するヨコ型事業構造に発想を切り替え「鉄骨サプライチェーン」に内在するムリ、ムダなど効率やコストを阻害する不都合な要因を関係者が連携して排除し、競争力の強化と安定的な事業基盤の確立を目指す必要があります。そういう意味で「品質証明ガイドライン」の適用・実施は重要な試金石になると考えています。既に、ガイドラインの良いところ取りを目論む対価なき品質要求の動きが顕在化しつつあるだけに本部としてもガイドラインの全面適用を急ぐこととしています。また、この他にも個々の取引では解決できない課題についても引き続き業界間の対話と連携を進め、双方にメリットのある解決策を模索していく所存であります。

最後になりましたが、本年は各支部との情報交換会と青年会の活動支援についても一層の内容充実を図り推進していきたいと思っております。会員諸兄のご理解とご協力をお願いし、年頭のご挨拶とさせていただきます。

(株) 富士鉄鋼センター 社長)

年 頭 ご 挨拶

鉄鋼産業懇談会

厚板部会長 守安 進

昨年の災禍を踏まえ、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

改めて昨年を振り返りますと、日本の製造業にとりましても『災』と『絆』の2文字で表せる年でした。

3月11日の東日本大震災では、広範囲に渡る地震・津波被害に加え、福島原発の事故もあり、東北地方を中心に甚大な被害をもたらしました。

更に追い討ちをかけるように、西日本での8月の台風による土砂災害、10月のタイでの洪水災害。度重なる災害の影響により、日本における製造業は、サプライチェーンの寸断から生産停止を余儀なくされ、その都度、『その企業の従業員の懸命の復旧活動により生産活動を再開する』といった決死の活動の連続でした。

そこで発揮したのが、サプライチェーンの『絆』による早期復旧でした。企業の垣根を越えた復旧協力により、驚くべき速さで生産再開にこぎつけた企業が多数ありました。『日本の物づくりの底力』をみたような気がします。

しかし、我々製造業を取りまく経済環境は非常に厳しく、欧州の債務危機、新興国の金融引き締めによる成長率の鈍化、大幅な円高による、製造業の海外シフトなど、今年もこのような外部環境は大きく変化しないと想定されます。

それは、厚板市場環境におきましても、同様な事が言えます。

国内造船は、受注残の減少が続き、建機・産業機械分野でも新興国の金融引き締めの影響が出始めています。更に、円独歩高の影響により、輸入鋼材の流入に歯止めがかかりません。非常に厳しい環境が今年も続くと思います。

しかし、国内厚板にとって、昨年とは大きく違います。『東日本再生』といった大事業があります。すでに、12兆円もの3次補正予算は決定し、年末には2兆以上の4次補正も閣議決定されました。昨年までは、瓦礫除去、仮設住宅などの復旧工事でしたが、今年からは、本格的な復旧・復興工事が始まるものと思います。まさにあらゆる産業の基礎資材である『鉄・厚板』の出番です。

製鉄メーカー、流通、シェアリング工業組合各社のサプライチェーンの『底力』をみせる番です。

復旧・復興に向け、迅速な対応を行い、これからの若い人が夢や希望のもてる東日本へ再生させる

一助になろうではありませんか。

本年は辰年で、昇り龍のごとく飛躍する年にしようではありませんか。

最後になりましたが、皆様方のご健康とご繁栄を心より祈念致しまして、私の挨拶とさせていただきます。

(JFEスチール(株) 常務執行役員)